あらたまの、としのはたちに、たらざりし、ときはのやまの、やまさむみ、風もさはらぬ、ふぢごろも、ふたゝびたちし、あさ霧に、こゝろもそらに、まどひそめ、みなしこ草に、なりしより、物おもふことの、葉を去げみ、けぬべき露の、よるはをきて、なつはみぎはに、もえわたる、螢を袖に、ひろひつゝ、冬は花かと、みえまがひ、このもかのもに、ふりつもる、雪をたもとに、あつめつゝ、ふみみていでし、みちはなを、身のうきにのみ、ありければ、こゝもかしこも、あしねはふ、去たにのみこそしづみけれ、たれこゝのつの、ざは水に、なぐたづのねを、久かたの、雲のうへまで、かくれなみ、たかくきこゆる、かびありて、いひながしけむ、人はなを、かびもなぎさに、みつしほの、よにはからくて、すみの江の、まつばいたづら、おいぬれど、みどりのころも、ぬぎすてん、はるはいつとも、去ら浪の、なみぢにいたく、ゆきかよひ、ゆもとりあへず、なりにける、舟のわれをし、君去らば、あはれいまだに、去づめじと、あまのつりなは、うちはへて、ひくとしきかば、物はおもはじ、

〔十訓抄十〕橘正通が身の沈める事を恨て、異國へ思立たる折ふし、具平親王の作文序書たりけるに、是をかぎりとやおもひけむ、

齡亞顏駟、過三代而猶沈、恨同伯鸞、歌五噫而將去、とぞかける、源爲憲其座に候けるが、此句をあやしみて、正通思心有て仕つれりと、申ければ、さすが心細くや思ひけん、涙をながしけり、さてまかり出るまゝに、高麗へぞ行ける、○又見古今著聞集

〔後拾遺和歌集十七雜〕つかさめしにもれてのゝとしの秋、うへのをのこども、大井にまかりて、舟にのり侍けるによめる、　大江匡衡朝臣

河舟にのりて心の行ときはしづめる身ともおもほえぬかな

〔古事談二臣節〕清少納言零落之後、若殿上人アマタ同車渡彼宅前之間、宅體破壞シタルヲミテ、少納言無下ニコソ成ニケレト、車中ニ云ヲ聞テ、本自棧敷ニ立タリケルガ、簾ヲ搔揚、如鬼形之女法師